

それ
 夫小大定めなし。一寸の物を一尺の物に対しては小と云ひ、五尺の男に対しては六尺・七尺の男を大の男と云ふ。外道の法に対しては一切の大小の仏教を皆大乘と云ふ。「大法東漸、通指仏教、以為大法」等と釈する是なり。仏教に入っても鹿苑十二年の説、四阿含經等の一切の小乗經をば諸大乘經に対して、小乗經と名づけたり。又諸大乘經には大乘の中にとりて劣る教を小乗と云ふ。華嚴の大乘經に「其余樂こよ小法ぎょうしょうぼう」と申す文あり。天台大師はこの小法といふは常の小乗經にはあらず、十地の大法に対して十住・十行・十回向の大法を下して小法と名づくと釈し給へり。又法華經第一の巻方便品に「若し小乗を以て乃至一人をも化す」と申す文あり。天台・妙樂は阿含經を小乗といふのみにあらず、華嚴經の別教、方等・般若經の通別の大乗をも小乗と定む。又玄義の第一に「小を会して大に歸す、是漸頓混合」と申す釈をば、智証大師は始め華嚴經より終はり般若經にいたるまでの四教・八教の権実の諸大乘經を漸頓と釈す。混合と云ふは八教を会して一大円教に合すところそことはられて候へ。又法華經の寿量品に「樂於小法ぎょう おしょうぼう徳薄垢重者とくはくくじゅうしゃ」と申す文あり。天台大師は此の經文に小法と云ふは小乗經にもあらず、又諸大乘經にもあらず、久遠実成くおんじつじょうを説かざる華嚴經の円乃至方等・般若・法華經の迹門十四品の円頓えんどんの大法まで小乗の法なり。又華嚴經等の諸大乘經の教主の法身・報身・毘盧遮那・盧舍那・大日如来等をも小仏なりと釈し給ふ。此の心ならば涅槃經・大日經等の一切の大小・権実・顯密の諸經は皆小乗經、八宗の中に俱舍宗・成実宗・律宗を小乗と云ふのみならず、華嚴宗・法相宗・三論宗・真言宗等の諸大乘宗を小乗宗として、唯天台宗の一宗計り実大乘宗なるべし。彼々の大乘宗の所依の經々には絶えて二乗作仏・久遠実成の最大の法をとかせ給はず。譬へば一尺二尺の石を持つ者をば大力といはず、一丈二丈の石を持つを大力と云ふが如し。華嚴經の法界円融えんゆう四十一位、般若經の混同無二・十八空、乾慧地等の十地、瓔珞經の五十二位、仁王經の五十一位、藥師經の十二の大願、双觀經の四十八願、大日經の真言印契等、此等は小乗經に対すれば大法・秘法なり。法華經の二乗作仏・久遠実成に対すれば小乗の法なり。一尺二尺を一丈二丈に対するがごとし。又二乗作仏・久遠実成は法華經の肝用にして諸經に対すれば奇たりと云へども、法華經の中にてはいまだ奇妙ならず。一念三千と申す法門こそ、奇が中の奇、妙が中の妙にて、華嚴大日經等に分絶えたるのみならず、八宗の祖師の中にも真言等の七宗の人師名をだにもしらず、天竺の大論師竜樹菩薩・天親菩薩は内には珠を含み、外にはかきあらし給はざりし法門なり。而るを雨衆うずが三徳・米齋べいさいが六句の先仏の教へを盗みとれる様に、華嚴宗の

澄観、真言宗の善無畏等は天台大師の一念三千の法門を盗み取って、我が所依の經の「心仏及衆生」の文の心とし、心実相と申す文の^{たましい}神とせるなり。かくのごとく盗み取って我が宗の規模となせるが、又^{かえ}還って天台宗をば下して、華嚴宗・真言宗には劣れるなりと申す。此等の法師は世間の盗人にはあらねども仏法の盗人なるべし。此等をよくよく尋ね明らむべし。

又世間の天台宗の学者並びに諸宗の人々の云はく、法華經は但二乗作仏・久遠実成計りなり等云云。今反詰して云はく、汝等が^{しょうぶく}承伏に付いて、但二乗作仏と久遠実成計り法華經にかぎて諸經になくば、此なりとも^{あに}豈奇が中の奇にあらずや。二乗作仏諸經になくば、仏の御弟子^{すだ}頭陀第一の迦葉、智慧第一の舍利弗、神通第一の目連等の十大弟子、千二百の^{らんかん}羅漢、万二千の^{しょうもん}声聞、無数億の二乗界、^{あんのんごう}過去遠々劫より^{むしゅごう}未来無数劫にいたるまで法華經に値ひたてまつらずば、^{しきしんとも}永く色心俱に滅して^{ようふじょうぶつ}永不成仏の者となるべし。^{あに}豈大なる^{とが}失にあらずや。又二乗界^{ほとけ}仏にならずば、迦葉等を^{ほんてん}供養せし梵天・^{たいしやく}帝釈・四衆・八部・比丘・比丘尼等の二界八番の衆はいかんがあるべき。又久遠実成が此の經に限らずんば、三世の諸仏^{せんめつ}無常遷滅の法に墮しなん。譬へば天に諸星ありとも日月ましまさずんばいかんがせん。地に草木ありとも大地なくばいかんがせん。是は汝が承伏に付いての義なり。実をもて^い勤へ申さば、二乗作仏なきならば、九界の衆生仏になるべからず。法華經の心は法爾のことはりとして一切衆生に十界を具足せり。譬へば^{ひとひとり}一人一人は必ず四大を以てつくれり。一大かけなば人にあらじ。一切衆生のみならず、十界の依正の二法、非情の草木^{みじん}一微塵にいたるまで皆十界を具足せり。二乗界仏にならずば余界の中の二乗界も仏になるべからず。又余界の中の二乗界仏にならずば、余界の八界仏になるべからず。譬へば父母ともに持ちたる者、兄弟九人あらんか、二人は^{ほんげ}凡下の者と定められば、余の七人も必ず凡下の者となるべし。仏と經とは父母の如し。九界の衆生は^{こご}実子なり。声聞・縁覺の二人^{ようふじょうぶつ}永不成仏の者となるならば、菩薩・六凡の七人^{あに}得道をゆるさるべきや。「今此の三界は皆是我が有なり、其の中の衆生は^{ことごと}悉く是吾が子なり、乃至唯一人のみ能く救護を為す」の文をもて知るべし。又菩薩と申すは必ず^{くせいがん}四弘誓願ををこす。第一衆生^{しゅじょう}無辺誓願度の願成就せずば、^{むじょう}第四の^{ぼだいせいがんしょう}無上菩提誓願証の願は成ずべからず。前四味の諸經にては菩薩・凡夫は仏になるべし、二乗は永く仏になるべからず等云云。而るをかし^{しか}こげなる菩薩も、はかなげなる六凡も共に思へり、我等仏になるべし、二乗は仏にならざればかし^賢こくして彼の道には入らざりけると思ふ。二乗はなげきを^懐いただき、此の道には入るまじかりし者をと恐れかなしみしが、今法華經にして二乗を仏になし給へる時、二乗仏になるのみならず、かの九界の成仏をも^説ときあらはし給へり。諸の菩薩此の法門を聞きて思はく、我等が思ひははかなかりけり。爾前の經々にして二乗仏にならずば、我等も

なるまじかりける者なり。二乗を永不成仏と説き給ふは二乗一人計りなげくべきにあ
らざりけり。我等も同じなげきにてありけりと心づるなり。又寿量品の久遠実成が爾
前の経々になき事を以て思ふに、爾前には久遠実成なきのみならず、仏は天下第一の
大妄語の人なるべし。爾前の大乘第一たる華嚴經・大日經等に「始成正覚、我昔坐道
場」等云云。眞実甚深正 直捨方便の無量義經と法華經の迹門には「我先道場」「我始
坐道場」と説かれたり。此等の経文は寿量品の「然我実成 仏已来、無量無辺」の文
より思ひ見れば、あに大妄語にあらずや。仏の一身すでに大妄語の身なり。一身に備
はりたる六根の諸法あに実なるべきや。大氷の上に造れる諸舎は春をむかへては破れ
ざるべしや。水中の満月は実に体ありや。爾前の成仏・往生等は水中の星月の如し、
爾前の成仏・往生等は体に随ふ影の如し。本門寿量品をもて見れば、寿量品の智慧を
はなれては諸経は跨節・当分の得道共に有名無実なり。天台大師此の法門を道場に
して独り覚知し、玄義十卷・文句十卷・止観十卷等かきつけ給ふに、諸経に二乗作仏
・久遠実成絶えてなき由を書きをき給ふ。是は南北の十師が教相に迷ひて三時・四時
・五時・四宗・五宗・六宗・一音・半満・三教・四教等を立て、教の浅深勝劣に迷ひ
し、此等の非義を破らんが為に、まづ眼前たる二乗作仏・久遠実成をもて諸経の勝劣
を定め給ひしなり。然りと云ひて余界の得道をゆるすにはあらず。其の後華嚴宗の五
教、法相宗の三時、眞言宗の顕密・五蔵・十住心・義釈の四句等は南三北七の十師の
義よりも尚誤れる教相なり。

此等は他師の事なればさてをきぬ。又自宗の学者、天台・妙楽・伝教大師の御釈に
迷ふて、爾前の経々には二乗作仏・久遠実成計りこそ無けれども、余界の得道は有り
など申す人々一人二人ならず日本国に弘まれり。他宗の人々は是に便りを得て 弥 天
台宗を失ふ。此等の学者は譬へば野馬の蜘蛛の網にかゝり、渴ける鹿の陽炎をおふよ
りもはかなし。例せば頼朝の右大将家は泰衡を打たんがために、泰衡を 狂 かにして義
経を打たせ、大将の入道清盛は源氏を 喪 ぼして世をとらんが為に、我が伯父
平馬介忠正を切る。義朝はたばらかされて慈父為義を切るが如し。此等は墓なき人々
のためしなり。天台大師法華經より外の経々には二乗作仏・久遠実成は絶えてなしな
んど釈し給へば、菩薩の作仏、凡夫の往生はあるなんめりとうち思ひて、我等は二乗
にもあらざれば爾前の経々にても得道なるべし。此の念ひ心中にさしはさめり。其の
中にも觀經の九品往生はねがひやすき事なれば、法華經をばなげすて、念仏申して浄
土に生まれて、觀音・勢至・阿弥陀仏に値ひたてまつりて成仏を遂ぐべしと云云。当
世の天台宗の人々を始めとして諸宗の学者かくのごとし。実義をもて申さば、一切衆
生の成仏のみならず、六道を出で十方の浄土に往生する事はかならず法華經の力なり。
例せば日本国の人唐土の内裏に入らん事は、必ず日本の国王の勅定によるべきが如し。

穢土えどを離れて浄土に入らん事は必ず法華經むすめの力なるべし。例せば民の女乃至閼白大臣の女に至るまで、大王の種おを下ろせば其の産める子王となりぬ。大王の女なれども臣下の種かいにんを懷妊せば其の子王とならざるが如し。十方の浄土に生まるゝ者は三乗・人・天・畜生等までも皆王の種姓と成りて生まるべし。皆仏となるべきが故なり。阿含經は民の女の民おとこを夫とし、華嚴ほうどう・方等・般若等は臣の女の臣を夫とせるが如し。又華嚴經・方等・般若・大日經等の円教の菩薩等は王女の臣下を夫とせるが如し。皆浄土に生まるべき法にはあらず。

又華嚴・阿含・方等・般若等の經々の間に六道を出づる人あり。是は彼々の經々の力には非ず。過去に法華經の種うを殖えたりし人、現在に法華經を待たずして機すゝむ故に、爾前の經々を縁として、過去の法華經の種ほつとくを発得して成仏往生遠をとくるなり。例せば縁覚の無仏の世にして飛花落葉ひけらくようを觀じて獨覺どっかくの菩提を証し、孝養父母の者の梵天に生まるゝが如し。飛花落葉・孝養父母等は獨覺と梵天との修因にはあらねども、かれを縁として過去の修因を引きおこし、彼の天に生じ獨覺の菩提を証す。而るに尚過去に小乗の三賢四善根にも入らず、有漏うるの禪定ぜんじょうをも修せざる者は、月を觀じ花を詠じ孝養父母の善を修すれども、獨覺ともならず色天にも生ぜず。過去に法華經の種を殖えざる人は、華嚴經の席はべに侍りしかども初地初住にも登のぼらず、鹿苑説教ろくおんの砌みぎりにても見思をも断ぜず、觀經等にも九品の往生をもとげず、但大小の賢位けんいのみに入しやういて聖位にはのぼらずして、法華經に來たつて始めて仏種しんでんを心田しんてんに下して、一生に初地初住等に登る者もあり、又涅槃の座へさがり乃至滅後未來までゆく人もあり。過去に法華經の種を殖えたる人々は、結縁けちえんの厚薄くわんに随つて、華嚴經を縁として初地初住に登る人もあり、阿含經を縁として見思を断じて二乗となる者もあり、觀經等の九品の行業を縁として往生する者もあり。方等・般若も此をもて知んぬべし。此等は彼々の經々の力にはあらず、偏ひとえに法華經の力なり。譬へば民の女むすめに王の種を下せるを人しらずして民の子と思ひ、大臣等の女に王の種を下せるを人しらずして臣下の子と思へども、大王より是を尋ぬれば皆王種となるべし。爾前にして界外へ至る人を、法華經より之を尋ぬれば皆法華經の得道なるべし。又過去に法華經の種を殖えたる人の根鈍どんにして、爾前の經々にほつとく発得せざる人々は法華經にいたりて得道なる。是は爾前の經々を乳母ばめのととして、きさき腹后の太子・王子と云ふが如くなるべし。又仏の滅後にも、正法一千年が間は在世のごとくこそなけれども、過去に法華經の種を殖えて法華・涅槃經にて覺りのこせる者、現在在世にて種を下せる人々も是多し。

又滅後なれども現に法華經ましませば、外道の法より小乗經にうつり、小乗經より權大乘にうつり、權大乘より法華經にうつる人々数をしらず。竜樹菩薩・無著菩薩・世親論師等是なり。像法一千年には正法のほどこそ無けれども、又過去現在に法華經

の種を殖えたる人々も少々之有り、而るを漸々に仏法澆薄ぎょうはくになる程に、宗々も偏執石いしの如くかたく、我慢山やまの如く高し。像法の末に成りぬれば、仏法依によってこうじょう諍論興盛して仏法の合戦ひまなし。世間の罪よりも、仏法の失に依って無間地獄に墮つる者数をしらず。

今は又末法に入って二百余歳、過去現在に法華經の種を殖えたりし人々もやうやく漸つきはてぬ、又種をうへたる人々は少々あるらめども、世間の大悪人、出世の謗法の者数をしらず国に充満せり。譬へば大火の中の小水、大水の中の小火、大海の中のまみず水、大地の中のこがね金なんどの如く、悪業とのみなりぬ。又過去の善業もなきが如く、現在の善業もしるしなし。或は弥陀の名号みょうごうをもて人を狂はし、法華經をすてしむれば背はい上じょうこう向下的とがあり。或は禅宗を立てきょうげ、教外と称し、仏教をば眞の法にあらずと蔑如して増上慢を起し、或は法相・三論・華嚴宗を立てべつじよ、法華經を下し、或は真言宗・大日宗と称して、法華經は釈迦如来の顯教にして真言宗に及ばず等云云。而るに自然に法門に迷ふ者あり、或は師々に依って迷ふ者もあり、或は元祖・論師・人師の迷法を年久しく眞実の法ぞと伝へ來たる者もあり。或は悪鬼天魔の身に入りかはりて悪法を弘めて正法とをもう者あり、或ははづかの小乗一途僅の小法知をしりて大法を行ずる人はしからずと我慢して、我が小法を行ぜんが為に大法秘法の山寺をおさへとる者もあり、或は慈悲魔と申す魔、身に入って三衣一鉢さんねいっばちを身に帶し小乗の一法を行ずるやからわづかの小法とうりょうを持ちて、国中の棟梁りゅうぞうたる比叡山竜象の如くなる智者どもを、一分我が教へにたがへるを見て、邪見の者悪人なんどうち思へり。此の悪見以をもて国主をたばらかし誑惑おうわくして正法の御歸依薄をうすうなし、かへて破国破仏の因縁となせるなり。かの姐己だつき・褒似ほうじなど申せし後は心もをだやかに、みめかたち人にすぐれたりき。愚王これを愛して国をほろぼす縁となる。当世の禅師・律師・念仏者など申す聖一・道隆・良觀・道阿弥・念阿弥など申す法師等は鳩鴿いえばとが糞を食するがごとく、西施せいしが呉王ごおうをたぼろかし誑ににたり。或は我が小乗しゅうぶん臭糞るにゅうの驢乳の戒を持ちて